

新青森林紀行

身近な山の「おどろ木」

梵珠山に
日本一太いブナがある



「梵珠山」と聞いて、あの山、とすぐに思い浮かぶ人はまず青森県民だろう。イチヨウの葉をさかさまに立てたような岩木山なら全国区だが、《五所川原市と青森市浪岡の境界をなす尾根上に位置する山》で《馬の背状の凡庸な山容》とネットで調べた解説にあるとおりに「地味」な山だ。標高468m。いわばどこにでもある低い山なのだが、そこに「日本一の太いブナがある」となると、にわかに輝き出してくる気がするではないか。幹回り（胸高幹周）8m62cmと資料にあるが、数値だけでは太さの実感は伝わってこない。見に行つてこそ巨樹、触れてこそ古木だ。2020年7月18日。青森市浪岡大釈迦にある青森県立自然ふれあいセンターに熟年男子5人が集合、「ミズバシヨウ登山口」から登り出した。

幹周8・62m「梵珠の神」
4年前に見学道を整備

梵珠山の登山ルートには4つの道がある。サワグルミの道、マンガンの道、アカゲラの道、ミズバシヨウの道。目当てのブナは、ミズバシヨウの道にあるらしい。

「では、出発しましょう」

自然ふれあいセンターのM館長を先頭に、一行はミズバシヨウの道へと向かった。



登山口の標柱に「クマ出沒注意」の文字が

最初に近付いてきた登山口の標柱に「クマ」の文字が見えた。ギョツとなる。「クマ出沒注意」の赤字の下に、「6月10日午前9時30分頃8合目」山



集合場所の「青森県立自然ふれあいセンター」

頂の間でクマの目撃情報がありました。ご注意ください」——。そこは「マンガン登山口」で、「ミズバショウ登山口」はその先と聞いて胸を撫で下ろした。けれど山は一つで道は繋がっているのだ。標柱には「センターではクマ鈴の無料貸出しをしています」と書かれていたが、一行5人のうち誰も鈴は付けていなかった。鈴の代わりに話し声を響かせながらミズバショウの池の傍らの木道を奥へ向かう。

参加者5人のうち、3人は「ソデカ杉探検」のメンバーだ。生えているはずがないところに生えているのが、ソデカ杉。青森県内で杉の限界標高といわれる700mを超える地点——南八甲田の袖ヶ谷地^{そでかやち}へその「まぼろしの杉」を見に行つたのは2014年のこと。6年前になる。

あのときは、片道2時間の山道を倒木や笹藪と格闘しながら進んだが、道が平坦だっ

たのに対して、今回のブナ探検は、片道30分だけけど急坂だ。階段状の登山道を、重力から体を引き離すようにして一歩一歩押し上げていく。

赤い帽子を被って先頭を行くM館長。続いて林業研究所のK所長。早くも息が荒くなっているのが『青森県産材の家』のライターのN。メンバーの中の最年長で、ひと月前に古稀を迎えたばかり。そのNに歩調を合わせてくれているのは元県職員のK氏と、薪ス



片道30分の急坂を登る一行

トープ愛好会のS会長。K氏は大学時代にワンダーフォーゲル部に所属していた山男で、S会長はロープを使った木登りも教えているアウトドア派。M館長はキリマンジャロにも登頂したことのある健脚の持ち主で、その後ろにびったりと付くK所長の後ろ姿がどんどん離れていく。Nがついに立ち止まって、呟いた——こんなにきつとは思わなかった。へ梵珠山に何か話のタネはありますか。M館長にそうメールしたのが始まりだった。M氏は3月で県職員を退職、自然ふれあいセンターの館長に就任していた。

「日本一太いブナがあります」

返信を見て、えっ、となった。日本一太いブナが、あの梵珠山にある、という。知らなかった。梵珠山といえば——弘前から青森へ向かう途中、大釈迦で目にする、改めて関心を抱くこともない身近な山だが、そ



幹回り6.8mの青森県では2位の太さのブナ。これでも充分な迫力だ

こに、日本で一番太いブナがある、と知って、「お見せしました」と水戸黄門の印籠にひれ伏す気分となった。

よし、やりましょう。M館長が領いて、「ブナ探検」が決まった。

.....

**2合目にも太いブナが
太さ6・8mで県内2位**

.....

登り坂の途中で、M館長とK所長が立ち止まっていた。待つていてくれた、のではな

かった。そばに太い木があった。これが青森県では2位の太さのブナらしい。幹回り6・8m。反対側に回ってみると、口を開けたような洞うづらになっていた。ブナの立つその地点が「2合目」の手前だったか、過ぎてからだったか、Nは分からない。分らないはずだ。ひたすら下ばかり向いて登ってきたのだから。

再び登り出す。休憩は必要なものだ。足に力が戻った。それでも長く続かないのが年齢

の現れで、やっと「日本一太いブナ」と書かれた道標に行き着いたときは、Nはどんじりであった。「862cm」とは、そこまでの距離ではなく幹回りの寸法だ。道標からは、ありがたいことに下りになった。まだ新しいヒバの角材を横にして段々にした木の階段を下り、鋭角にカーブする途中から、M館長が、あそこです、と指さした。張られた手すりのロープから身を乗り出すように見



やっと行き着いた「日本一太いブナ」の道標

遣る。そんなに遠くではないが近くでもない斜面に、ブナの木が1本、やや傾いて立っていた。

45度を超える急な斜面 オオカメノキを命綱に

巨樹・古木の醍醐味は、間近に立ったときの圧倒感だ。眺め遣るだけでは迫力は伝わってこない。そばに行くにはさっきの道標まで戻って、そこから下るが、道はないそうだ。道がないから永いこと発見されな

かったのだ。調査隊に発見され、日本一と認定されてから、梵珠山のシンボルとして公開しようと道標と見学道が整備された。

足元から切れ落ちた急な斜面を降り出す。45度より鋭角だ。斜面に突き出ている枝みたいな細い木につかまりながら、片足で支え、次につかまる木を探す。親指くらいの太さのこの木はオオカメノキという灌木で、成長しても2〜3mほどだと、K所長が教えてくれた。うっかりつかみそこね



急斜面に根を張り、300〜400年間も立ち続けている日本一太いブナ

たり、足が滑ったりすれば下まで転げ落ちるだろう。そのような急斜面に、根を張り、数百年もの間、立ち続けているのだ。

すらりと伸び立つ美しい姿では到底そんな永く生き続けることはできないのだろう。それを納得させられるのが、洞だ。幹を穿つ大きな穴。裂けた口に見える。四文字熟語で形容

するなら「阿鼻叫喚」。1本の幹ではなく、裂けて、樹皮からさらに幹が伸び上がっている。凸凹な幹回りが、倒れまいと踏ん張る必死の形相に見えてくる。

雪の重みで折れたらしい枝の先がざぎざだ。雪崩に耐え、台風を凌ぎ、根元を揺さぶる地震にも耐えて生き永らえ



「阿鼻叫喚」の様相を呈するブナの洞

てきたのだ。

事前にネットで「日本一太いブナ」を検索したデータによると——『2010年4月24日に、県立自然ふれあいセンター（原田直英館長）が、県樹木医会の斎藤嘉次雄事務局長を講師に招き、一般希望者50人が立ち会って計測した結果、日本一太いことが分かっ



裂けた口のような樹皮からは新たな幹が育ち、生命力を感じさせる

た。2007年10月の計測では8・56mで、秋田県仙北市和賀山塊のブナに4cm及ばず、国内2位とされていた」という。

斜面に立つ木の幹回りを測定するには、山側に立ち、地面から1・3mの高さに巻尺を回して測るらしい。そこが「胸高幹周」。2007年の計測では、8人がかりで巻き尺を水

平に保ちながら回して測ったそう。ブナの寿命は約300年といわれるが、この日本一太いブナの樹齢は300年〜400年。M館長によると、「切つて年輪をかぞえるのが正確な樹齢ですけど、切るわけにはいきませんからね。あくまでも推定樹齢です」

このブナは、「梵珠ファガシークラブ」

(ファガシーは、ブナの意味)が、梵珠山に生育する樹木のうち、巨樹・古木の条件である幹回りが3m以上の樹を調査して発見したものだという。山道からそれた斜面に生えているので人目にはつかなくったのだ。見学用の道標と道が整備されたのは2016年のことである。「すごいー!」

目の当たりにして発する言葉はそれだ。すごい。それしかない。幹の凸凹に触れてみる。すごい。裂けた口のような樹皮から新たな幹が育っている生命力。すごい、としか言いようがない。まさに「梵珠の神」。

K所長がブナから離れ、斜度をもっともしない足取りで降りていく。振り返った手にカメラを持っていった。下から仰ぐ角度でブナだけを撮るつもりようだったが、誰かのタイミング良い「記念写真!」の声に、4人が寄り合ってしゃがんだ。はい、チーズ。

ブナに寄り添う「木霊」少年のような熟年たち

ブナ探検のあとはキャンプだ。探検に出かける前に、県民の森のキャンプ場にテントを張っておいた。テントもシュラフも、焼肉用の炭までM館長が準備してくれた。

天気予報では夜中に傘マ

クが付いていたものの、大雨洪水警報が出ているわけではなかった。それに雨が落ちてきてもそのときはテントの下で、野外での美酒に酔いしれて夢の中だろう。

キャンプには林業女子会@青森の2人が参加した。ソデカ杉探検のメンバーでもあった。1人は、新型コロナ対策で国から支給された臨時収入で買い求めた念願だったというマイテントを持参した。

炭の火起こしに難儀した。新聞紙が湿気っているのかなか火が点かない。やっと点いたと思えば、広がらずに煙になつてしまう。ライターでまた点ける。ワンダーフォーゲル部だったK氏が、両手で囲って根気よく育てた火種がだんだんと炎になり、炭が赤くなり出した。

K所長が口に当てて吹いたのは、ラジカセのアンテナであった。てっきりそうだと信じてしまうほどアンテナにそつ



夜の宴にそなえて県民の森のキャンプ場にあらかじめ張っておいたテント

くりだったが、れつきとした火起こしのアウトドア用品なのだという。効果てきめんで、炭が音をたてて真っ赤になった。その上に炭をのせていく。網の上で肉がおいしい匂いを漂わせ出した。肉を噛んではビールで飲み下ろす。持ち寄り

が、と女子たちにおだてられてNはたわいなく酩酊した。今何時？ 誰かが聞いた。11時。誰かが答えた。11時！ 誰かのびつくりした声。5時頃から飲み始めたのだった。もう11時！



夜がふけるほどに明るさを増すランプの灯り

2日後——K所長からパソコンに写真が送信されてきた。K所長が撮ってくれた記念写真だ。
“梵珠の神”に寄り添ってしゃがんでいる、少年のような熟年4人。
“木霊”たちに見えた。

た日本酒や焼酎や、ウイスキー、ワインが酔いを煽る。日が暮れてしまえば時の流れは見えない。
「太宰治の短編『魚腹記』の出だしに梵珠山が出てくるんですよ」
へえー、と皆がNを向く。
『本州の北端の山脈は、ぼんじゅ山脈というのである』という出だしだ。青森県民でなくても文学好きの人には太宰の小説でお馴染みの山なのだ。さあ、

「浸水だあつ！」
叫び声で目が覚めた。
「浸水だあつ！」
K氏だった。一緒のテントに寝ていたのだとそのときに知った。滝に打たれたような音。大雨なのだった。稲光に浮かび上がったK氏の影が、うずくまっているように見えた。そこまでは憶えている。
次に目覚めたときは明るくなっていった。隣にK氏はいなかった。テントの出入口のところに白い靴下が置かれてあった。絞れば滴るほどに濡れている。ははあ、と気が付いた。真夜中にK氏がうずくまっていたのは、この靴下で浸水した

シートの水を拭いていたのだな。さいわいNのほうまで浸水しなかったのは、K氏のシュラフが堰堤の役割りをしてくれたからだ。
K氏は避難して車の中で寝ていた。
濡れたテントを見渡してM館長が言った。
「おれって雨男なんだよな。イベントがあると雨になる」
そういえば、あの6年前のソデカ杉探検のときにも雨に祟られた。登山口のある御鼻部山展望所に着いたら、大粒の雨が落ちてきた。長靴に履き替え、ぬかるむ道に足を取られながら進んだ。カッパの帽子を叩く雨音が蘇る。